

参加と主体性のデザイン

Proceedings of Convivial Design Forum: 2024 Spring / Summer [2024.6.1]

自律協生スタジオ活動報告 [2024年度 春/夏]



武蔵野美術大学ソーシャルクリエイティブ研究所と日本総合研究所が「自律協生スタジオ (Convivial Design Studio)」を開設してから、1年半が経過した。

「コンヴィヴィ」の愛称で親しまれる「自律協生スタジオ」は、デザインやアートの力をあまねく社会に価値提供できるものになりたいと考えていた武蔵野美術大学と、社会課題解決や社会価値創出にデザインやアートの力が欠かせないとの認識を深めていた日本総研との出会いから生まれたものだ。

コンヴィヴィでは、「自律協生社会の実現」に向けた共同研究を行っている。「自律協生社会」とは、自律的・主体的な個が他と力を合わせることで実現する、生き生きとした関係と喜びに満ちた社会のことを指す。力を合わせる相手には人間のみならず、自然や機械（テクノロジー）も含まれる。

自律協生社会が目指すのは、多様な個に居場所と出番があり、それぞれがそれぞれに本領発揮できる社会である。本格的な人口減少期を迎えた日本社会が目標とすべきは、個の本領発揮である。たとえ人口が減っても、一人ひとりが十二分にその持てる能力を発揮し、力を合わせ、1+1が2以上になる世界をつくることができれば、この国は十分にやっていけると思うからだ。いや、むしろ、それぞれの人や地域が本領発揮できるのならば、これまでよりずっと充実感と生き甲斐に満ちた社会になるはずだ。

そんな自律協生社会の実現に向けた共同研究のアプローチも、この1年半で随分と多様になってきた。地域、テクノロジー、制度・組織、福祉、教育などの切り口からの研究と実践を重ねる中で、共通するテーマとして浮上してきたのが、参加と主体性の問題である。

「自律」は、個々人が主体性をもって判断・行動することを意味する。だが、この主体性の発揮が実はとても難しい。世間のしがらみ、前例踏襲主義、組織の同調圧力などの中で、主体的に考え、行動することを封印してきた人々があまりに多いからだ。ただ、例えば意思決定の現場に、忖度を知らない子ども達を参加させるなど、参加の対象や方法を工夫することで、封印されていたものが解き放たれ、主体性が発動される時がある。

どうやら自律協生社会の鍵は、参加と主体性のデザインにありそうだ。当初設定した共同研究の期間は、残すところ1年半。残りの期間で、参加と主体性のデザインを探求してゆきたいと思う。

参加と主体性のデザイン

未来の姿を共にデザインする場に 自律協生スタジオがなるといい



interview

谷崎勝教

株式会社日本総合研究所
代表取締役社長 兼 最高執行役員

代表取締役社長兼最高執行役員として、コンヴィヴィの開設を
発案・主導した谷崎勝教さんに、シンクタンク／コンサルティング
ファームである日本総研が美大と協働する背景などを伺いました。
三井住友フィナンシャルグループのグループCDIO（チーフ・デジ
タル・イノベーション・オフィサー）を務めた経験もある谷崎社長か
らは、イノベーションを巡る興味深いお話が聞けました。

言っているだけ、書いているだけでは伝わらない

——「自律協生スタジオ」を開設して1年半が過ぎました。なぜシンクタンク／コンサルティングファームが美術大学と協働するのか、改めてその狙いを教えて下さい。

日本総研はシンクタンクとしてレポートを書き、有識者を輩出して、政府の会合などでも提言を行ってきましたが、本当にこの国を変えることに貢献できてきたのかという反省があります。何が正しいのかもわからなくなるほど情報が氾濫する中で、言っているだけ、書いているだけでなく、もっと目に見える形で共有していかないと伝わらないし、世の中を動かすことはできないのではないか。そういう問題意識から、アートやデザインの、見えないものを可視化する力に関心を持つようになりました。ちょうどその頃に、武蔵野美術大学と出会って、美大とつながれば、社会的に意味あることができるのではないかと考えるようになったのです。

——コンサルティングファームとしての日本総研から見て、ビジネスシーンで求められる美大や美大出身者の力は何かとお考えですか。

これまでの企業活動は過去からの延長線上で経営を考えることがほとんどでした。しかし、これからは10年後に社会がどう変わるか、消費者がどう変わるか、個人に対するサービスがどう変わるかという視点で未来をデザインしていく能力が必要になります。その時に重要なのが、“新たな問い”を立てる力です。アートの世界では「何のために、何をつくるのか」という問いを見出すところからスタートしますよね。この“問う力”が、これからはビジネスシーンでも大変に重要になっていくはずですよ。新しい製品やサービスをゼロベースで考えたり、今までの常識を疑ったりができるセンスと言い替えることもできるでしょう。美大ではゼロからものごとを考え、制作するトレーニングを重ねるからこそ、そういったセンスが身につくのではないのでしょうか。三井住友銀行でスマートフォンのアプリを刷新したときに、そのことを実感しました。美大出身のデザイナー達が、画面の見やすさやユーザーの心に訴えるあり方など、私達銀行員とは全く違う発想でアイデアを次々と出してくれたのです。やはり、問う力を鍛えるトレーニングを大学生のうちから続けないとこうはならないと痛感しました。

“問う力”と“レジリエンス力”がイノベーションを実現する

——確かに、美大では、答えを出すこと以前に、問いを立てることが重視されますね。

問う力と共に、いままでに誰もやったことがないことにチャレンジする能力も美大出身者の魅力のひとつです。そして、それを支えているのが、レジリエンス力、すなわち「逆境や困難をしなやかに乗り越え、回復する力」だと思います。美大で学んでいると「つくりたいものが見つからない」「自分よりもすごいものをつくる人が身近にいる」「自分には才能がない」など、心が折れそうになる瞬間が何度もあると思います。それでもつくり続けるには、相当のパワーが必要ですよ。そういう中でレジリエンス力が自然と

身につくのではないのでしょうか。ムサビの学生を見ていると、そういった美大ならではの“個の力”を感じます。イノベーション人材とは「テクノロジーがわかる人」や「プログラムが書ける人」ではなく、失敗しても歩みを止めずにプロジェクト遂行のために挑戦し続けるレジリエンス力を持った人です。“問う力”と“レジリエンス力”は、イノベーションを実現するために不可欠な力だと思いますね。

自律協生社会の実現に向けて

——自律協生社会の実現に向けて、美大はどのように貢献できそうですか？

自律協生社会とは、自ら律する、つまり、自らアジェンダセッティングし、問いを立て、自分なりの解を生み出せるような個人がベースとなる社会です。そういう個、多様性のある個の集合体に企業や行政がなっていくと、これからは生き残っていきません。何も強い個じゃないと生き残れないと言っているわけではありません。ただ、あまりにも今の日本社会は個が置き去りになっているので、もっと個の主体性が発揮されないといけないと思います。組織の論理の前に自分を押し殺し、或いは思考停止してもたれ合うのでなく、主体的に生きる。そうじゃないと楽しくないです。その人の本領も発揮されない。そのためにも自らの置かれた状況を問い直す。問うことから自律は始まるんです。

自律し、個が立とうとすれば、当然、他者とぶつかります。ぶつかるから、どうしたいか、どうあるべきかを話し合う。諦めずに何度も話し合っていれば、仲間になり、協力できる関係になる。それが協生です。美大が培ってきた問う力とレジリエンス力は、自律協生社会を実現する上でも不可欠になると思います。

可視化する力も重要です。妄想がイメージとして見える化されることで、こんなことができるんだと自信が生まれ、できることはたくさんあるんだと気づく。そうなれば人は変わることができます。一つの地域や組織で生まれた小さな成功例でも、それが見える化されることで、ロールモデルになり、まわりも変わっていく。小さな成功例が互いにつながり、さらに大きなうねりになっていくのが自律協生社会です。

——最後に企業へのメッセージをお願いします。

企業も自分達の未来のイメージを持つべきですよ。短期的な成果ばかりに血道をあげるのではなく、自分達の企業が社会にどういう形で貢献できるのか。何をつくれれば社会がウェルビーイングを享受できるようになるのか。それをイメージできるようにすることが、社員のモチベーションという意味でも重要になっています。企業の目指しているものをはっきりさせることができれば、経済性ばかりが追求される空気も変えていける気がするんです。今こそ、企業自身の未来をデザインする力が問われているんだと思います。自律協生スタジオは、色々な企業とこれからの社会のあり方を議論し、共に未来をデザインする、オープンな共創の場になったらいいなと考えています。是非、仲間になって下さい。

聞き手 | 武蔵野美術大学 ソーシャルクリエイティブ研究所 増田悠紀子

二項対立を溶かし、参加を促し、主体性を引き出すデザインを



discussion

井上 岳一

株式会社日本総合研究所
創発戦略センター エクスパート

若杉 浩一

武蔵野美術大学
ソーシャルクリエイティブ研究所 所長

お二人は地域でのフィールドワークと、月に1度の市ヶ谷キャンパスでのゲストを迎えてのConvivi Lab（コンヴィヴィラボ、以下、ラボ）の活動を、共同研究の主軸として行われています。一見すると、地域と都市という対極にある場所での別々の活動にも見えますが、この2つはどのような関係にあるのでしょうか？

井上: そもそも僕はなぜ地域に行ってるんでしょうね（笑）？

若杉: 人やものを集約することによって、合理的な社会ができるのだというようなことの中で、地域も小学校や役所をどんどん集約していくわけじゃないですか。その流れは今度は人の流れとなって都心にどんどん集約する。だから、暴論で言う都市しかいらぬ、みたいな話になるんですけど、そういう極論じゃなくて、都市も地域もありという、二つの極が存在し得るという状況が、多様性の糸口としてもすごく大切な気がしています。地域をデザインするというよりも、都市と地域という2つの間に何があるかっていうことを問うことが重要だと思うんですけどね。

井上: 僕が「自律協生」を言い出したのも、人口が減少する中で、どうしたら地域は維持できるのだろうかという問いがあったからです。仰るように、人が減っていくのだからもっと集約すべきだという考えは当然にあって、それは農山村のような非効率な地域にはもう人は住む必要ないじゃないかという結論を導く。でも、今の経済構造に合わないから捨ててしまえという考えは、今の社会に合わない人は捨ててしまえという考えと重なります。

若杉: ほんとだよ。

井上: ある1つの価値観やシステムが支配的になり、その一つの軸で選別が行われていく社会が果たして正しいのか？森が雑多な生物から成るように、人間には色々な存在価値や役割があるはずで、多様な人間のそれぞれがそれぞれに本領を発揮できる社会。それが僕達の言う自律協生社会です。人だけでなく、地域も多様でなければ、本領発揮の社会＝自律協生の社会とは言えない。

若杉: 東京は、色々語るための機能やコンテンツを持ってるわけです。一方で地域は、そういう営みや活動は全く語られないので、その魅力や可能性を伝える人も、デザインする人もいない。ここに圧倒的な偏りがある気がしています。僕らが地域に出かける理由は、我々が捨ててしまったものは何で、どんな可能性があるのかということを見比べないと、真ん中にある問いは出てこないような気がするからです。

井上: ラボは、僕らが地域で見えたものを東京の企業に共有することを通じて、その現代的な意味や価値を考えられる機会になったらいいと思って始めたのだけど、蓋を開けてみたら、結構、自身が悩みを抱えている人が多く来たんですよね。というのも、CSRとかSDGsとか言われる中で、社会と関係を結ぶことが今の企業には求められていて、でも、企業の価値観丸出しで社会と関わられるかというとなかなかうまくいなくて、それでみんな悶々としている。

若杉: うん、そうですね。

井上: そういう悶々や悩みを赤裸々に語ってくれたときにウケるという傾

向もあって、段々とゲストの団体や企業のやり方を教えてもらいながら、それぞれの悩みや課題をシェアする場にもなっていたんです。

若杉: そうそう。例えば官民連携とよく言われるけど、官と民が連携することは極めて難しく、都市と地域の連携もそうだし、形式的には連携する必要だと思っているが、具体的な真ん中にあるものについて、本音を語り合ったり、曝け出したりするっていう場所や具体例が少ないんですよね。だからその真ん中の具体的な可能性を、みんなで探している。その中で見つかったポイントに、みんなが手を差し伸べていくっていう具体的な形がすごく欲しいんですよね。ラボはそのための一つの場所ですね。

無邪気に弱みを曝け出せる場所がない

井上: 会社にいるとなかなか弱みを曝け出すことができないけど、曝け出すとそこから広がっていくところもあって、ラボはそういう場所になってきているのかなと思います。結局僕らが今、地域でやっていることも、そこに暮らす人達の悩みを聞くことだったりしますよね。例えば、北海道の森町で仲良くなった農家の方が言っていたんですが、僕らと出会った頃は、実はもう農業をやめようと思っていたと。未来が見えなくて、もうこれ以上やってもしょうがないと思っていたんだそうです。でも、僕らと話し、僕らが仲良くなった漁師さんとか、地域の面白い人達、頑張っている人達を集めた「変態解放区」と名付けた月イチの飲み会に参加するようになって、辛さも弱さも共有できる仲間ができたことで、もう1回農業やってみよう、やれる限り頑張ってみようと思うようになったと言います。彼は、今ではカフェや直売所を立上げ、農場で音楽フェスやったり、バーベキューしたり、なんかもう開花し、本領を発揮し始めている。それこそ蛹から成虫になるような「変態」をして「解放」されたんですが、何でそんなふうになれたんですか？と聞いたら、「仲間ができたから」と言うんですよね。それ聞いて、ああ、みんな孤独だったんだなーと。中学の同級生とか農協の人とか、話す人、友達はいらぬですよ。でも、例えば、変態解放区には全然別の業界の漁師がいて、その漁師もずっと不漁で、「これがあと1年続いたら本当にヤバイ」とか、福祉作業所の経営者が「今、もう崖っぷちです」とか、炭焼きが「いつまで持ちこたえられるだろう」とか、悩みや深刻な状況を、時に笑い話を交えながら話してくれるんだけど、そうやって無邪気に弱みを曝け出して共有できる場所が、意外と地域にはなかったんだなと思って。飲み会の最後に一人ひとりの状況を皆で聞き合う時間をつくっているんですが、それが大事な時間になっていますよね。

若杉: 安全で安心な場があるから自分の主体性や可能性を曝け出せる。そういう場所って、社会の中には少ないですよね。だって、会社の中でそんなことを曝け出したら、「あいつは変なやつだ」って言われちゃう。

井上: 今、企業では「心理的安全性」って言葉がすごく流行っていて、チャレンジしてイノベーションを起こすためには心理的安全性が必要だとこぞって言うんですが、ちょっとコンプライアンス違反とか起こすとめっちゃ怒られるんですよね。やっぱり失敗を許さない文化があるんです。それは人を萎縮させます。

若杉: あるある。結局、心理的安全性っていうけど、競争的な関係を生



み出している限り、絶対に敗者は出てくるわけじゃないですか。そういう中でたくさんの人が孤立して生きてるんじゃないですかね。だから小中学校で不登校が起きたり、ひきこもりの問題がでてくる訳で、それじゃちょっと創造的で主体性を持っている環境をつくりていないですよね。

井上: 僕の息子も小四の終わりにから不登校になるんですけど、いつだったか「お前はいつも否定から入るじゃないか」って息子に言われたんですよね。親って、自分の子どもにはちゃんとしてほしいと思うから、「あれするな」「これはダメ」って、結構、否定しちゃっじゃないですか？多分それが降り積もって、息子の自己肯定感や生きるエネルギーを奪ってしまったんだろうなと思うんです。かと言って、褒めて伸ばせというのも違って、「できようができまいがお前は这个世界にいていいんだ」という存在に対する絶対的な安心感や肯定感を育ててあげなければいけなかったんですよね。

若杉: そうですよね。

井上: 親は世間体を考えて叱ったり禁止したりするから、それに縛られて子ども達が萎縮しちゃっらうなと思います。それが不登校が増えていることの一つの理由になっているのは間違いないと思うんですよね。うちの場合、もう絶対に否定や禁止するのやめよう決めて、ゲームだってなんだってやりたい放題にして、叱ることもせず、そういう状態で好きに過ごすことを本人に任せていたら、丸2年して、生きるエネルギーが溜まってきたみたいで、「あれやりたい」「あそこ行きたい」と主体的な欲求、社会に参加しようという意欲が出てきたんですよね。顔つきも変わった。小学校の卒業式は出ると言い出して、4月から中学生ですが、今のところは中学校には行ってるんです。息子を見ていて、エネルギーを充填できる安心できる居場所が人には必要なんだと痛感したんですよね。ヒマラヤ登山にベースキャンプが必要なように、挑戦には避難所が必要なんです。でも、そういう安心できる場所って、今、地域にも企業にもないんじゃないかな。

若杉: ないよ、ない！

保守本流よりサブシステムに可能性がある

井上: ものづくりを通じてそういう居場所が作れないかと思って、今年からは「つくるコミュニティ」づくりに挑戦していますよね。この間も森町で木偶（木の人形）を皆で作ってみたいじゃないですか。でも、つくること自体は



楽しかったんだけど、それが目的化しても駄目なんだろうなと思って。例えば天草の「しもうら弁天会」は、「つくるコミュニティ」としての成功例だけれども、あそこは作ることが目的化していないですよね？

若杉: いないですね。

井上: 天草の下浦地区は昔からの石工の町で、九州大学の研究者達の研究プロジェクトをきっかけに、石工達の石切丁場が持っている歴史的・文化的価値に気づいて、そこを何とか再生させられないかということを目指し、弁天会が組織されたんですね。それとは別に、若杉さんは天草に伝統的にあった泥人形を未来につなげないかと、モダンな泥人形をデザインして、MUJI (良品計画) に提案したら1,000個の受注がとれて、それで細々と泥人形を作っていた高齢の職人達に報告しに行ったら、「そんなにつくれな」と断られて途方に暮れて。その状況を見かねた弁天会の人達が「それなら私達がつくる!」と立ち上がってくれたんですね?それで素人が職人から教わって、何とか作れるようになった。

若杉: そうです。今では「下浦土玩具」と名付けていますが、そうやって土玩具づくりは始まったんです。彼らからすると、泥人形は災難の一つだったと思いますよ。「なんでこんなことやんなきゃいけないんだ?」と。

井上: 「しょうがねえな」って言いながら始めたのだけど、結果として、その売上で石切丁場の再生をするという、自分達の所期の目標を達成できる手段になっていったわけですね。

若杉: そうです。しかも、もの作りを通じて、弁天会の繋がりがより強くなり、それぞれ個性的な人達だけど助け合いながら物を作っていた。その作ったものを喜んで、応援してくれる人達がいる。結果として、経済も回るようになった。

井上: 地域を回っていると、頑張ってきた地域ほど、諦めてしまっているのを感じるんですね。あれもこれもやったけど、結局、ダメだったじゃないかと。

若杉: そうそう。そういうところばかり。

井上: でも、弁天会はそうじゃない。弁天会を見ていて、ものづくりの力を感じたから、「つくるコミュニティ」を作れば、諦めていた地域も希望を取り戻せるのではないかと思ったのだけど、ものづくりはやっぱり手段で、その先の希望になるような物語とか、象徴がないといけないんだなと思ったんですね。

若杉: ものづくりが大切なんじゃなくて、その思いやプロセスが一つのビジュアルとして見えるものになることが重要なんだと思いますよ。「それ昔、

俺達も言ったけれど、結局、駄目だったじゃん」と諦めている地域でも、一つの間やもものとして生まれ変わることによって、前進するエネルギーになっていくわけですね。みんなが考えていることが、共通の資産として目の前に、形として現れるってということが重要ですね。

井上: デザインにはそういう可視化の役割がありますよね。でも、こういうことをしたいっていうそもその希望はどうやって見いだせるんだろう? 弁天会の場合はなんで石切丁場が希望になったんですか?

若杉: 下浦というのは、元々石工職人の町で、それが衰退の一途を辿っているわけです。それを何とか守りたいが、手立てがない。それを全く違う泥人形がきっかけになって、見直すことができたんじゃないかな。僕は保守本流ってめちゃくちゃ難しいような気がしてるんです。

井上: 「保守本流」とは？

若杉: 例えば、「石工職人を再生させる」っていうのがこの場合の保守本流です。それよりも、亜流や邪道、その中で生まれたエネルギーが、下浦の今後を考えるきっかけになった。つまり、保守本流よりもそのサブシステムの方に可能性があるんじゃないかと思うんです。

井上: なるほどね、サブカルチャーみたいなものなのかな。確かに下浦の文脈で言えば、石工が衰退しているから石の産業をなんとか再生させたいと思っても、それは簡単じゃない。石の産地はどこも苦しんでいますからね。ちょっとやそつとではどうにもならない。

若杉: そうそう。例えば下浦で石のデザインをして商品が売れたとしても、ちっとも希望にならないです。企業もそんな状況のような気がするんです。メインシステムだけで生きてきて、サブシステムがない。そもそも、泥人形は、農閑期の百姓のサブシステム、つまり冬場の手慰みです。つまり、メインに対してのサブであって、メインは例えば今の農業なわけです。そのメインである農業は効率化され、売り上げは昔より上がったのかもしれないけど、ちっとも楽しくない。というか、もう次のイノベーションが起こせない状況になっている。だから、我々はそこにサブカルチャーを持ち込もうとしているんじゃないですか？

喜びや自己表現が最終的に経済を動かす

井上: 僕らはどんなサブカルチャーを持ち込むべきなんだろう？

若杉: さっき心理的安全性、主体性、本領発揮という言葉がありましたけど、経済的な合理性や理屈ではなく、これって楽しい、嬉しいよね、っていう文化の持続性の話であって、そういうものがいかに我々の社会の中で重要であるかということをどっかで解き明かそうとしているような気がしてならないですね。

井上: 今、色々な地域で色々な人の話を聞いているけれど、僕が結局のところ何をしているのかというと、「人は何をもって喜びとして生きるのか」とか、そういうことを探しているような気がするんです。

若杉: 「喜びなんて無駄なこと、余計な事考えなくていいから、真面目に仕事しろ」っていうのが、これまでの社会じゃないですか？

井上: 言葉を発することもなく、ただ黙々と夜明けから夜半までトラクター走らせたり、ひたすらトマトをいじりしていると、確かに喜びとか楽しみの中

感覚は麻痺してきますよね。

若杉: そうそう。

井上: そういう人達に対して、「あなたは何を喜びとしてやっているんですか?」みたいなことを、日々の暮らしや日常の営みの話を聞くふりをしながら、聞き出していくわけだけど、そこで初めてフリーズしていた感情や個人の奥底に眠っていたものが、解冻されていく感じはありますよね。

若杉: 井上さんが「なるほどなるほど」とか「そうなふうになっていたんだ!面白いですね!」とか、いちいち褒めたり、認めたりしながら聞かれないですか。そうすると、話してるほうも、「もしかしたら自分のやっていることは面白いのかもしれないな」って、エンジンを発動させる。そうやって固まっていたものが溶け出すことで、メインが豊かになっていくっていうことなのかもしれないですね。

井上: 結局みんな孤独だし、メインシステムで頑張り続ける中で、感情と向き合うことをどこかに置き忘れてきた。みんなと交わって、分かち合うことが、いかに喜びや楽しさにつながるのか、今、思い出しているのかもしれないですね。だから何はともあれ人が集まって何かをやらかし始めるというのがまずは大事で、そこから新しい経済が生まれたりするのかもしれないですね。**若杉:** 経済のために動くんじゃなくて、自分達の自己表現や喜びが先にあって、それが動いていくと最終的にビジネスになっていくっていう流れを、メインシステムだとなかなかやれないわけですよ。

井上: ラボに来る人達も、ビジネスで頑張る中で1人の人間としての感情を封印しているから、そこに「そういうことを考えていいんだ」っていう自信を与えなくちゃいけないし、そういうこととビジネスの接続の方法を考えなくちゃいけないでしょうね。やっぱり自分の感情に嘘をついて仕事をしているとうつ病になっちゃったりするわけで。優秀なビジネスマンほど、心を無にして駆け抜けてきたけれど、もう一回自分を取り戻しながら、それを経済に結びつけていく。その方法論を僕達は探しているのでしょうか。

若杉: そうだと思います。身を粉にして、言葉も発せず社会の仕組みを動かしてきた。それが今、急速に社会全体が縮退するっていう思いもしない結果を導き出している。その中で、もう一つのサブシステムをどう社会全体で動かしていくのかっていうのが、これからの課題で、それは経済主導じゃない、違うエンジンを回さなければいけない。その中で沸き起こる何かが、必ずビジネスになると僕は思っています。それをちゃんと論理的に説明したい。

表現する恐れや二項対立を乗り越えるために

井上: イヴァン・イリイチは、経済のようなメインシステムが社会を覆い尽くしていく中で失われていくものがConvivialityだと説いたわけですよ。経済に過剰適応していくと、人間の尊厳や喜びといった感情がどんどん麻痺していく。そうやって麻痺しながら磨いていった経済システム自体が、持続可能じゃないということに気づき始めて、じゃあどういうシステムなら良いのかを見出すべく、地域に分け入り、色々な人の話を聞いているのですが、めちゃくちゃ感動するんですよ。それは地域に生きる人々の話の中に、小さな、けどとても真剣な、願いとか祈りみたいなものが含まれ

ているのを感じ取るからです。漁師のおかみさんが、たった50円、時給を上げることができないかというんな工夫をしながら棒寿司をつくる、そんな小さな話の中に、人の尊厳や喜びと分かちがたく結びついた労働のあり方があることに気づく。願いや祈りなど、表現に通じるものが日々の営みや経済の中にあることを知るわけです。「芸術家は食えない」という言い方に象徴的ですが、表現と経済とは別ものだと僕はいつの間にか思われされてきたけれど、表現と経済は、全然二項対立じゃないですね。

若杉: 別に企業でも、自己表現ややりたい活動を実施できるはずなんですけど、暗黙のうちに企業に入る=企業戦士になることだと考えて表現と経済活動を分離してしまってる。そこはデザインすべき領域です。

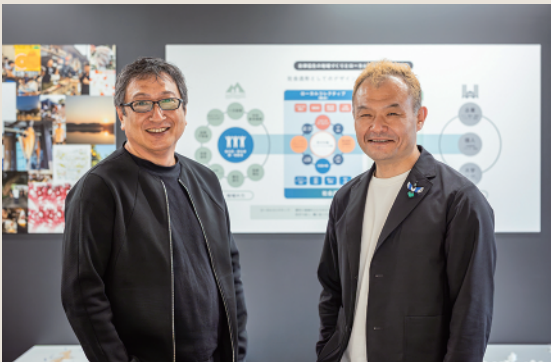
井上: 僕らが大好きな『へうげもの』(山田芳裕、講談社)も、武家社会の中で失われていく喜びとか楽しみをどう取り戻していくかという古田織部の苦闘を描いた漫画でしたよね。自分を表現しながら経済活動も営んでいくことを、アーティストじゃないビジネスパーソンが普通にできるようになることが、僕らが目指していることなのかな。

若杉: 個人のスキルでも、会社以外の領域でたくさん可能性があって、しかもそれは会社に貢献できるスキルだと思うんですよね。そういうスキルは、社会をうまく循環させるためのもう一つのエンジンなんです。サブシステムっていうメイン以外の領域に参加することをどうデザインするのが、次の社会のデザインなんじゃないかな。

井上: 自分を表現することは怖いことですね。でも、その恐れを乗り越えていかないと、本当の意味での主体性や参加は生まれません。その恐れを個人が乗り越えていくために、関わり方や環境、組織やシステムをどうデザインできるのかを探らなくちゃいけない。

若杉: 都市と地域といった二項対立を超えて、その真ん中にある関わりしるをデザインしたいって、言葉では簡単に言えるけどまったく未知の領域。でも、ここに新しい可能性があるとしたら、それは企業にとっても行政にとっても新しい社会システムとして駆動できるものになる気がします。

井上: そうですね。都市と地域、表現と経済、官と民、企業と市民。この二項対立を溶かすデザインですね。美大と連携しているのは、美大には形にする力があるからです。当初設定した3年間の共同研究の期間も残すところ1年半となりました。二項対立を溶かし、参加を促し、主体性を引き出すデザインを具体的な形や方法に落とし込んでいくのが、残り1年半の宿題です。



Convivi Lab コンヴィヴィ・ラボ



Convivi Labは、自律協生スタジオが月に1度開催している研究会です。ゲストの講義のあとは、本学の学生も交えての懇親会で親睦を深めます。どなたでも参加可能です。ご参加を希望される方は下記のQRコードからご連絡ください。

場所 武蔵野美術大学市ヶ谷キャンパス

参加費 無料(懇親会費別)

参加方法 下記QRコードからお申し込みください

自律協生スタジオに関するお問い合わせ

自律協生スタジオの活動に関するレポートやお知らせについては、下記からご確認ください。



<https://rcsc.musabi.ac.jp/contacts/>



<https://rcsc.musabi.ac.jp/convivi/>

